

ピーマン

農薬取締法上、「ピーマン」は「とうがらし類」とは別作物である。「ピーマン」は、「ピーマン」、「ピーマン及びとうがらし類」、「なす科果菜類」、「野菜類」に適用のある農薬を使用すること。「ピーマン」には、カラーピーマン、カリフォルニアワンダー、パプリカなどが含まれる。

—— 発病・加害時期
 == 発病・加害最盛期

作型・病害虫名		月											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普	通					▲ 定植							
疫	病												
斑	病												
う	病												
斑	病												
青	病												
炭	病												
モ	病												
ザ	病												
ア	類												
ミ	ウ												
ハ	マ												
ハ	ウ												
コ	類												
オ	ガ												

疫病

留意事項

- 1 降雨による土壌の跳ね上がりで伝染する。

防除方法

- 1 土の跳ね上がり防止のため、敷わらなどでマルチングを行う。
- 2 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避ける。
- 3 発病株の早期発見に努め、発病した果実、枝等は直ちに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 排水を良好にして過湿を避ける。
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

- ・ [ランマンフロアブル](#) 2 1 【2,000倍 前日／4回】
- ・ [ライメイフロアブル](#) 2 1 【2,000～4,000倍 前日／3回】
- ・ [レーバスフロアブル](#) 4 0 【2,000倍 前日／2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

斑点細菌病

留意事項

- 1 梅雨と秋の長雨の多湿時に発生が多い。
- 2 カスミンボルドー、銅パーシン水和剤は、眼に対して強い刺激性があるので眼に入らないよう注意する。

防除方法

- 1 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 2 被害茎葉は伝染源となるので早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [カスミンボルドー](#)、[銅パーシン水和剤](#) 2 4 M 1 【1,000倍 前日／5回】

うどんこ病

留意事項

- 1 25℃前後で乾燥時に発生が多い。
- 2 モレスタン水和剤は、ハウス内で高温の時、薬害が生じることがあるので注意する。
- 3 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 SDHI剤 (7) は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 窒素過多を避ける。
- 2 定植時に、下記の薬剤を施用する。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) P 2 【5～10g／株 植穴土壌混和 定植時／1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [モレスタン水和剤](#) M 1 0 【2,000～3,000倍 前日／3回】
 - ・ [トリフミン水和剤](#) 3 【3,000～5,000倍 前日／5回】
 - ・ [パンチョTF顆粒水和剤](#) 3 U 6 【2,000倍 前日／2回】
 - ・ [アフェットフロアブル](#) 7 【2,000～4,000倍 前日／3回】
 - ・ [パレード20フロアブル](#) 7 【2,000～4,000倍 前日／3回】

斑点病

留意事項

- 1 多湿を好み、梅雨と秋の長雨時期に発生が多い。
- 2 カスミンボルドー、銅パーシン水和剤は、眼に対して強い刺激性があるので眼に入らないよう注意する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

- 1 被害茎葉は伝染源となるので早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 2 定植時に、下記の薬剤を施用する。
 - ・ [オリゼメート粒剤](#) P 2 【5～10g／株 植穴土壌混和 定植時／1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ラリー水和剤](#) 3 【4,000～6,000倍 前日／4回】
 - ・ [カスミンボルドー](#)、[カップパーシン水和剤](#) 2 4 M 1 【1,000倍 前日／5回】
 - ・ [ベンレート水和剤](#) 1 【2,000～3,000倍 前日／3回】

青枯病

留意事項

- 1 病原菌は、土壌中で長期間生存し、土壌伝染する。
- 2 気温20℃以上で発生し、25℃以上で多発する。

防除方法

- 1 なす科作物（なす、トマト、ピーマン、ばれいしょ等）の連作を避ける。
- 2 センチュウ類防除を徹底する。
- 3 排水を良好にし、過湿、過乾燥を避ける。
- 4 地温の上昇を防ぐため、敷きわらなどを行う。
- 5 発病株は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 化学肥料等の集中的な施用を避け、根を傷めないようにする。
- 7 ハウスでは、夏期高温時に太陽熱利用による土壌消毒を行う。
（Ⅻ土壌消毒 1太陽熱利用による土壌消毒 参照）

炭そ病

留意事項

- 1 温暖で雨が多いときに発生が多い。
- 2 病斑上の胞子が、雨等の水滴で飛散、伝播する。
- 3 種子伝染する。
- 4 SDHI剤（7）は、耐性菌が出現しやすいので1作1回程度の使用に努める。

防除方法

- 1 排水を良好にする。
- 2 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 3 発病した果実や葉は、早めに除去するとともに、被害株は収穫後、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 下記の薬剤を散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ダコニール1000](#) M5 【1,000倍 前日／3回】
- ・ [ベンレート水和剤](#) 1 【2,000～3,000倍 前日／3回】
- ・ [ベジセイバー](#) M5 7 【1,000倍 前日／3回】

ウイルス病

留意事項

- 1 モザイク病として、トウガラシマイルドモットルウイルス（PMMoV）、キュウリモザイクウイルス（CMV）を病原とするものの他に、トマト黄化えそウイルス（TSWV）などがある。
- 2 生育初期の感染は被害が大きい。

防除方法

- 1 苗床は寒冷しゃで被覆し、アブラムシ類の侵入を防ぐ。
- 2 アブラムシ類（キュウリモザイクウイルス（CMV））、アザミウマ類（トマト黄化えそウイルス（TSWV））の防除に努める。（アブラムシ類、ミナミキイロアザミウマの項参照）
- 3 発病株は早期に除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 ハサミ等で芽かきする際にウイルスが伝搬する可能性が高いので、発病株らしき株は芽かきを後回しにする（トウガラシマイルドモットルウイルス（PMMoV）、キュウリモザイクウイルス（CMV））。

アブラムシ類

留意事項

- 1 主にワタアブラムシ、モモアカアブラムシが発生する。
- 2 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は3回以内（但し、定植時までの処理は1回以内、散布及び定植後の株元散布は2回以内）。

防除方法

- 1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 2 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ダントツ粒剤](#) 4A
 【1g／株 株元処理 育苗期後半／1回】または
 【1g／株 植穴処理土壌混和 定植時／1回】
 【1～2g／株 株元散布 定植後（前日）／2回】
 - ・ [ベリマークSC](#) 28
 【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10～20L（1株当り25～50ml） かん注
 育苗期後半～定植当日／1回】
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A 【3,000倍 前日／2回】
- ・ [コルト顆粒水和剤](#) 9 B 【4,000倍 前日／2回】
- ・ [モベントフロアブル](#) 2 3 【2,000倍 前日／3回】
- ・ [トランスフォームフロアブル](#) 4 C 【2,000倍 前日／2回】

ミナミキイロアザミウマ

留意事項

- 1 虫は葉裏、花、幼果（へたの下）に多い。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 ほ場周辺の除草を行う。
- 2 ハウス開口部を赤色ネット（目合い0.8mm）で被覆する。
- 3 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 4 下記の薬剤を施用する。
 - ・ [ベリマークSC](#) 2 8
 【アザミウマ類 400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10～20L（1株当り25～50ml）
 かん注 育苗期後半～定植当日／1回】
 - ・ [ベストガード粒剤](#) 4 A
 【1～2g／株 植穴処理土壌混和 定植時／1回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【アザミウマ類 2,000倍 前日／2回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5 【アザミウマ類 2,500～5,000倍 前日／2回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) 2 3 【アザミウマ類 2,000倍 前日／3回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) UN 【アザミウマ類 1,000倍 前日／2回】
 - ・ [ファインセーブフロアブル](#) 劇 3 4 【アザミウマ類 1,000～2,000倍 前日／3回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4 A
 【アザミウマ類 2,000倍 前日／2回】

ハダニ類

留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 2 カンザワハダニとナミハダニが寄生する。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ニッソラン水和剤](#) 10A 【2,000~3,000倍 前日/2回】
- ・ [コテツフロアブル](#) 劇 13 【2,000倍 前日/2回】
- ・ [マイトコーネフロアブル](#) 20D 【1,000倍 前日/1回】
- ・ [ダブルフェースフロアブル](#) 25B 21A 【2,000倍 前日/1回】
- ・ [スターマイトフロアブル](#) 25A 【2,000倍 前日/1回】

ハスモンヨトウ

留意事項

- 1 若齢幼虫の防除に重点を置く。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [ディアナSC](#) 5 【2,500~5,000倍 前日/2回】
 - ・ [アタブロン乳剤](#) 15 【2,000倍 前日/3回】
 - ・ [ファルコンフロアブル](#) 18 【4,000倍 前日/2回】
 - ・ [BT剤](#) 11A (IX野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照)

コナジラミ類

留意事項

- 1 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
- 2 すずの発生やトマト黄化葉巻ウイルス (TYLCV) を伝搬させるほか、果実の着色不良の原因となる。
- 3 スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は、3回以内 (但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計2回以内)。
- 4 キルパーは、「適用病害虫 (設定なし)」で、使用目的として、「コナジラミ類蔓延防止」とした登録がある。使用方法は、「予め被覆した内で、所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布または、かん水する」。

防除方法

- 1 ハウス開口部を防虫ネット (目合い0.4mm) で被覆する。
- 2 栽培終了後、ハウス内の作物残さや雑草を除去し、ハウスを密閉して残っていた虫を殺す。
- 3 発生初期に、天敵寄生蜂のオンシツツヤコバチを放飼する。
- 4 下記の薬剤を施用する。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ベリマークSC](#) 28
 【400株あたり薬量：25ml、希釈水量：10～20L（1株当たり25～50ml） かん注
 育苗期後半～定植当日／1回】
 - ・ [モベントフロアブル](#) 23
 【500倍 かん注（25～50ml／株） 育苗期後半～定植当日／1回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [グレースシア乳剤](#) 30 【2,000倍 前日／2回】
 - ・ [スタークル顆粒水溶剤](#)、[アルバリン顆粒水溶剤](#) 4A 【2,000～3,000倍 前日／2回】
 - ・ [トランスフォームフロアブル](#) 4C 【1,000～2,000倍 前日／2回】
 - ・ [コルト顆粒水和剤](#) 9B 【4,000倍 前日／2回】
- 6 前作栽培終了後から残さ撤去までに、コナジラミ類の蔓延防止を目的として下記の薬剤を施用する。
- ・ [キルパー](#) 8F
 【適用病害虫（設定なし） 原液として40～60L／10a
 前作のトマトまたはミニトマト 前作栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）／1回】
 【適用病害虫（設定なし） 原液として60L／10a 前作のきゅうり
 前作栽培終了後から残さ撤去まで（は種または定植の15日前）／1回】
- 7 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除1（1） 参照）

オオタバコガ

留意事項

- 1 多犯性で、多くの作物を加害する。
- 2 早期発見に努め、若齢幼虫時に防除する。
- 3 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

防除方法

- 1 幼虫による被害が大きいため、食害痕や虫フンに注意し、捕殺に努める。
- 2 摘除した茎葉や果実、被害果にも、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
 - ・ [グレースシア乳剤](#) 30 【2,000倍 前日／2回】
 - ・ [アフーム乳剤](#) 6 【2,000倍 前日／2回】
 - ・ [ベネビアOD](#) 28 【2,000～4,000倍 前日／3回】
 - ・ [ディアナSC](#) 5 【2,500～5,000倍 前日／2回】
 - ・ [プレオフロアブル](#) UN 【タバコガ類 1,000倍 前日／2回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合がありますので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合がありますので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [コテツフロアブル](#) 劇 13 【2,000倍 前日／2回】
- ・ BT剤 11A (Ⅸ野菜類の病害虫防除 3野菜類 参照)

病虫害と間違いやすい生理障害

尻腐れ果

留意事項

- 1 初夏の高温で乾湿の差が激しく、窒素質肥料の肥効が高い時に発生しやすい。
- 2 石灰欠乏に伴う生理障害である。

防除方法

- 1 堆肥を十分施すとともに、窒素質肥料の過用を避ける。
- 2 深耕し、保水力の強い土づくりに努める。
- 3 土壌の過乾過湿を防ぐため、ビニルマルチや敷わらなどを行う。
- 4 塩化カルシウム200～300倍液を葉面散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。